

ビルと動物園

2008(平成20)年8月28日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本・編集＝齋藤孝／出演＝坂井真紀／小林且弥／山口祥行／渡辺哲／勝村政信／馬淵英俚可／犬山イヌコ／森廉／三浦誠己（アートポート配給／2007年日本映画／100分）

第3章

意外な設定が興味をひく

……ビルの外から窓拭きをしていると、ビルの中の人間たちは動物園の動物たちと同じ……？ なるほど、なるほど！ 29歳のOL香子と21歳の音大生慎の出会い、ビルのガラス越しだったが、そこから生まれてくるドラマとは……？ 「Simple is best」をモットー(?)にした、等身大の男女が織りなす物語は興味津々。さて、あなたはこの映画から何を学ぶ……？

面白いタイトルに注目！

この映画でまず注目したいのは、そのタイトル。『ビルと動物園』って一体ナニ……？ この映画の主人公原田香子（坂井真紀）はいわゆるアラサー（Around30）の女性。現在29歳の香子は大手企業のOLだから、そのオフィスは当然ビルの中にある。

他方、この映画に登場する動物園は名古屋市にある東山動物園とのことだが、ビルと動物園に一体どんな関係が……？ それを解くカギは、大村慎（小林且弥）のバイト先の先輩一太（山口祥行）のセリフに。

一太の哲学は？

慎と一太がやっているバイトは、『青空のルーレット』と同じ高層ビルのガラス拭き。『青空のルーレット』の原作は、辻内智貴が自らの音楽活動や窓拭きのアルバイトの体験をふまえて、「夢を持ち続けることの大切さ」をテーマとして書いた小説だが、私はその「軽さ」がハナについて（『シネマルーム16』377頁参照）。

ところが、もともと動物園に勤めていたという一太が動物園を辞めて、今高層ビル

の窓拭きに精を出しているについては立派な哲学があるようだ。それは、ビルの外からビルの中の人間模様を見るのは、動物園で檻の中にいる動物を見るのと同じだということ。つまり、ガラス越しに見る無防備な人間たちを観察するのがいかに面白いか、「それを垣間見れるこの仕事は、俺にとっての動物園」というわけだ。なるほど、なるほど。

そこで生まれたのが、『ビルと動物園』というインパクトのあるタイトル。

これがアラサーの典型パターン？

2008年8月27日付読売新聞によると、「女性は結婚しなくても幸せな人生を送ることができるか」とのテーマについて、1978年にはそう思うが26%、そう思わないが50%だったのに対し、2008年ではそう思うが55%、そう思わないが39%と大きく変化しているとのことだ。

香子の同僚のれな（馬淵英俤可）や先輩でめでたく寿退社する笹部（犬山イヌコ）は、「仕事よりも恋」とはっきり割り切っているようだが、香子はどっちつかず……？

また、父親の原田史郎（渡辺哲）から「自分のこと、将来のことをどこまで考えているのか！」と一喝されたように、結婚についてもどっちつかずであるうえ、今は上司の杉浦（勝村政信）との不倫関係をひきずっているから最悪。そのうえ、最近杉浦がえらく冷たいのは杉浦の妻に子供ができたためだから、いつまでもこんな関係をひきずってはいはダメ。香子も心のどこかでそう考えているのだが、なかなかそこから抜け出せないのが今のアラサーのつらいところ……？ そんなことを考えると、香子はアラサーの1つの典型かも……？

香子がそんな現実を抜け出すきっかけとなったのが、ビルの窓越しに目と目を合わせた慎との出会い。それまで女の子に疎かった(?) 慎はここで香子に一目ボレしたようだが、さて慎は今後いかなるアプローチを……？

香子を動物にたとえれば？

一太は慎と違って女性へのアプローチに積極的。また、かつて動物園で動物を散々観察してきたうえ、今も高層ビルの外からガラス越しにさまざまな人間の生態をじっくりと観察しているから、人間を見抜く能力は抜群。したがって、香子のような年上

の清楚な感じの女が慎の好みだと知った一太がとった行動は早かった。

何と、一太はその後すぐに香子の職場に入っていく、わかったようなわからないような理由をつけて香子を屋上に連れ出して慎とご対面！ こんな仲介の労をとった一太の経験豊かな観察眼(?)によれば、香子を動物にたとえればナニ……？ それを今ここで言ってしまうのは身も蓋もないから内緒。さて、一太ほど詳しくなくとも動物好きのあなたなら、香子を動物にたとえたらナニ……？

音大生も大変

私がビックリしたのは、ビルの窓拭きのバイトをしている慎が音大でバイオリンをやっている学生だったこと。しかも、慎の親友でピアノを専攻している修治(森廉)のピアノ伴奏でバイオリンを演奏している姿を見ると、こりゃかなりのレベル……？ さらに、慎と香子が動物園で2度目のデートをした時、慎は動物の鳴き声を絶対音感で聴き分けることができることが明らかになったから、彼のレベルは相当なもの……？

しかし、お坊っちゃんまの修治(?)から一緒に演奏会をやらうという誘いを、「バイトがあるから」という理由で断っている慎の姿を見ると、バイトをしながら音大に通うのは大変なことがよくわかる。そこで私が注目したのは、香子の恋人として香子の父親史郎に紹介されたのに、それがウソだとバレて史郎から罵倒された後、慎はどんな人生の選択をするのかということ。音大を卒業した学生のうち、超エリートはソコの演奏家を目指すわけだが、そこで成功するのはホンの一握りだけ。また、交響楽団の団員に入れるのも、かなり優秀で恵まれた人だけ。音大の卒業生の多くは子供たちにピアノやバイオリンを教えたりして、何とか生活費を稼ぐだけというパターンが多いはずだ。

そんな中、慎が選んだ道は、自分の育った小学校に戻って音楽の教師になること。私の気持では、せっかく苦労して音大を卒業し、しかも絶対音感の持ち主なのに、小学校の音楽の先生で満足するのはもったいないと思うのだが、慎にしてみればこれが最も地に足をつけた選択。しかもこれは、彼にとっては年上の女性香子との結婚を見据えた選択かも……？ 私の経験から言えば、そりゃ大学時代に年上の人妻に憧れることがあるかもしれないが、あまりそこに入り込んでダメ。だって、天下の音大生(?)の慎には、まだいくらでも美人で自分にピッタリ合う女性とめぐり会えるチャ

ンスがあるのだから……？

齋藤孝監督のこだわりは？

最近ではテレビでも派手派手しいバラエティー番組が多いし、映画でもハリウッドの影響を受けて、ド派手な演出で観客の目を引こうとする傾向が強い。ところが、この映画はそれと全く逆。プレスシートによれば、齋藤孝監督がこの映画でこだわったのは、全体として「シンプルに作る」ということ。その具体的な表れは、①時間軸を絶対にずらさない、②セリフを少なくする、③音楽を極力入れないということであり、④“物語に合ったトーン”の映像にしたいなあということらしい。

時間軸に沿い、セリフが少なく、音楽の少ない淡々とした映像という、いかにも退屈そうだが、そんなこだわりを好ましいと思うかダメと思うかは、あなたの感性次第。私はたまにはこんな映画もいいナと思うのだが……。

ラストシーンもシンプル！

ハリウッド大作もフランスのおしゃれな映画も、あるいは年間400本もつくられている邦画も、ラストシーンをどうつくるかに気をつけているのは当然。アッと驚く結末もあれば、なるほどと納得するものも……。しかして、『ビルと動物園』のラストシーンは……？

それは良く言えばシンプル、あるいは余韻を残すもの。しかし、悪く言えば不明確……？

映画は所詮つくりものだから、脚本によっていろんなパターンのものでつくりができる。いったん父親の元に帰った香子が再び東京へ戻る時、それまでの中途半端なアラサー気分から吹っ切れたことはまちがいないようだ。また、香子の父親から一喝されたことによって、慎も小学校の教師になるという将来の方向性が固まったはず。そうすると、互いに惹かれ合っている29歳の香子と21歳の慎が愛を確かめ合う中ハッピーエンドというラストシーンもありうるが、さてこの映画は……？

2008(平成20)年8月30日記

表紙撮影の舞台裏（9）

わが事務所では、数年前から私の誕生日会が定例化している。昔に比べれば随分暇になったとはいえ、ほぼ毎日法廷か試写室の仕事（？）がある私が、1月26日事務所に戻ると、何らかのサプライズがあり、誕生日プレゼント授与式とバースデーケーキを囲んだおしゃべり会になるわけだ。

2009年1月26日は60歳の還暦を迎える特別な日。きっと赤いちゃんちゃんこを着せられるだろうと予想しながら会議室に入っていくと、今回の事務員たちの心づくしの仕掛けはもっと大袈裟なものだった。つまり、①くす玉の紐を引くと「還暦おめでとう」の垂れ幕が落ち、②赤いちゃんちゃんこは手づくりの和紙製で帽子まであり、③プレゼントは私がこれまで1度も乗ったことのない新品自転車。これには大感激！

しかして、『シネマ21』の表紙にこの風景を使わない手はないと即決することに。大阪市中央公会堂をバックにした『シネマ20』の表紙は専門家の手による野外撮影だったから天気の良い日を選んだが、今回は部屋の中だからいつでもオーケー。そこで難しいのは①くす玉をバックに入れるか？②帽子を被るか？③自転車も一緒に撮るか？等の構図選定だが、何枚も撮っていく

うちに結局これがベストという1枚に落ち着くことに。

そんな作業の中でセットとして決定したのが、裏表紙には赤ちゃん時代から60歳までの私の人生の歩みの写真を使うこと。

その場ですぐに決定したのは、①自宅に飾っている赤ちゃんの時の写真と②大学1回生の時の内灘に立つ写真。そこで名曲『涙そうそう』の歌い出しの歌詞のように古いアルバムをめくってみると①高校3年生まで過ごした松山での幼少時代と中・高校生時代、②大学時代、③修習生時代、④若手弁護士時代の写真がたくさんあった。

小学生の頃は色白で紅顔の美少年だし、青年期は全体的にスマートでいかにも利口そう。もちろん髪の毛は真っ黒だ。裏表紙にはそんな赤ちゃん時代から修習生時代までの6枚の写真が、セピア色のフィルム模様の中にピツパリ。これでド派手な表紙とのバランスはバッチリ、おしゃれにキメることができたと自画自賛しているが、さてあなたのご意見は？

おふざけもいい加減にしろ……？
そんなキツイことをおっしゃらず、一緒に楽しんでほしいものだ。

2009（平成21）年2月18日記